

令和4(2022)年度事業報告(案)

(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

公益目的事業1 (指定寄付に基づく社会福祉事業)

【海外難民救援事業】 360万円

毎日新聞社会事業団が、毎日新聞紙面との連動で1979(昭和54)年から「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」として始めた海外難民救援事業は、2022年度で44年目を迎え、新型コロナウイルスの影響で中断していた海外取材を再開。ロシアのウクライナ侵攻で、戦火を逃れ隣国のポーランドやモルドバに避難した人々の様子や思いを取材チームが報告。前年度末から6月にかけて2回にわたり「ウクライナ侵攻」「離散—モルドバ報告」として紙面化した。

新聞紙面で避難民の様子を知った多くの読者から、他の地域の難民支援と合わせて浄財が寄せられた。西部社会事業団は東京、大阪両事業団とともに、国際機関の日本ユニセフ協会や国連UNHCR協会、「ペシャワール会」「ロシナンテス」をはじめとするNGOなど22団体に総額4230万円を届けた。キャンペーン当初からの救援金の総額は17億718万8344円になった。

海外救援金の配分先と配分額は以下の通り。

【西部管内】

ペシャワール会	30万円
ロシナンテス	30万円
国連UNHCR協会(ウクライナ支援)	200万円
難民を助ける会(同)	100万円

【東京・大阪管内】

国連UNHCR協会	1000万円
国連世界食糧計画WFP協会	390万円
日本ユニセフ協会	620万円
国境なき医師団日本	300万円
日本国際ボランティアセンター(JVC)	60万円
難民を助ける会	600万円
シェア=国際保健協力市民の会	40万円
AMDA	170万円
シャンティ国際ボランティア会	40万円
ワールド・ビジョン・ジャパン	300万円
難民支援協会	40万円
緑のサヘル	30万円
バーンロムサイジャパン	30万円
UNDP(国連開発計画)	100万円
TMAT	50万円
Community Life	20万円
アフガニスタン女性支援プロジェクトEJAAD JAPAN	20万円
STAND ALIVE	20万円

ネパール・ヨードを支える会 アジア子ども基金	20 万円 20 万円
---------------------------	----------------

計 22 団体 4230 万円

【小児がん征圧募金】 100 万円

平成8(1996)年から展開している毎日新聞と毎日新聞社会事業団のキャンペーントリビュート「生きる——小児がんの子どもたちとともに」と連動した募金。当年度は、東京、大阪と合わせ全国で32団体に、1325万円を配分。第27次までの贈呈総額は4億1155万円となった。

小児がん征圧募金の配分団体と配分額は以下の通り。

【西部管内】

にこスマ九州	15 万円
九大病院小児医療センター親の会・すまいる	15 万円
九州がんセンター小児科親の会・大きな木	15 万円
久留米大病院小児科血液グループ親の会・木曜会	10 万円
コメディカル・クラウン	10 万円
長崎ペンギンの会	10 万円
宮崎ひまわりキャンプ	10 万円
レモネードスタンド in ふくおか実行委員会	15 万円

【東京・大阪管内】

がんの子どもを守る会 (含むスマートムンストン)	120 万円
難病のこども支援全国ネットワーク	100 万円
公益信託日本白血病研究基金	80 万円
ファミリーハウス	10 万円
スマイルオブキッズ	10 万円
メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン	10 万円
そらぶちキッズキャンプ	10 万円
小児脳腫瘍の会	10 万円
アジア・チャイルドケア・リーグ	10 万円
パンダハウスを育てる会	10 万円
ゴールドリボン・ネットワーク	10 万円
あいち骨髄バンクを支援する会	65 万円
ふくふくばるーん	65 万円
京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ 「にこにこトマト」	65 万円
京都ファミリーハウス	65 万円
近畿小児血液・がん研究会	65 万円
しぶたね	65 万円
守口ぶどうのいえ	65 万円
日本クリニクラウン協会	65 万円

こどものホスピスプロジェクト TSURUMI こどもホスピス	65 万円
チャイルド・ケモ・サポート基金	65 万円
名古屋小児がん基金	65 万円
三重大学病院小児科父母の会・ひだまり	65 万円
京都・がんと生殖医療ネットワーク	65 万円

合計 32 団体 1325 万円

【災害被災者救援事業】

651万2913円

国内各地で大雨による災害は発生したが、広域にわたる大規模な被害がなかったため、募金の呼びかけはしなかった。しかし、2月になってトルコ南部でマグニチュード7.8の地震が発生。隣国のシリアと共に大きな被害を受け、両国の犠牲者は5万人を超え、1万人以上の犠牲者が出了世界の災害は、2011年の東日本大震災以来となった。

東京・大阪の両事業団と共に救援金を呼びかけ、新聞やテレビで現地の惨状を知った皆さんから多くの浄財が寄せられた。この中から、当事業団は現地で支援活動にあたる2団体に150万円を寄託、残金は23年度に繰り越した。

また、東日本大震災救援金と毎日希望奨学金にも、たくさんの方々から善意が寄せられた。東日本大震災救援金は、福島県に50万円▽希望奨学金は、事務を担当する大阪社会事業団へ400万円送金した。ともに残金は次年度へ繰り越した。

西部社会事業団への救援金・奨学金は以下の機関・団体に配分、贈呈した。

【トルコ・シリア地震救援金】

難民を助ける会	100 万円
国境なき医師団	50 万円

【東日本大震災被災者救援金】

福島県災害対策本部へ	50 万円
------------	-------

【毎日希望奨学金】

大阪社会事業団へ	400 万円
----------	--------

【九州豪雨災害救援金】

熊本県人吉市へ	51万2913円
---------	----------

公益目的事業2 (一般寄付に基づく社会福祉事業)

【児童福祉事業】 384万6963円 (43.7%)

児童虐待や養育放棄などがやまず、子どもたちを取り巻く環境は相変わらず厳しい。社会のあすを担う大事な子どもたちを守り、育むため、今期は5事業を助成・援助した。

「一円玉募金」による無料学習塾事業を支援 「NPO法人 和む」の吉本満廣・理事長が、市民から広く浄財を集め、給付型奨学金支給するため、15年秋から始めた「一円玉募金」。国が新しい給付型制度を導入したため奨学金給付は21年度で終了。その後、経済的に困っている家庭の中学生を対象にした「無料の食事付学習塾」を新たにスタートさせた。新型コロナ禍で募金は思うに任せず、当事業団も引き続き助成した。
10万円

合同自立体験セミナー 筑豊京築地区児童福祉施設長会が、管内の児童養護施設に在籍する中・高生を対象に、職場体験などを通じて卒業後の社会人としての自覚を促すために実施しているが、ここ2年はコロナ禍で中止。当期は9月18日、3年ぶりにオンラインで各施設を結び、弁護士や消費生活アドバイザーが講演した。急きょ実施することになり、開催に要した実費を助成した。
3万1990円

青少年の自立を支える福岡の会「自立援助ホーム」年間運営費助成 児童養護施設退所後の15~20歳の青少年の自立を支援するNPO団体。2008年7月に「かんらん舎」をオープンし、15年度には2か所目の「結ホーム」を開設、さらに19年度は3か所目の「リープ」の運営を開始した。福岡市からの補助金や会員の会費、寄付金で運営しているが、資金不足のため厳しい状態が続いている。今期も「母の日・父の日募金」を財源に助成。「リープ」の老朽化したTVと冷蔵庫の更新に充てた。
17万円

「毎日小学生新聞」「NEWSがわかる」無料お届け 毎日新聞社の関連会社である毎日新聞西部アシストから、地域貢献のため、「毎日小学生新聞」と月刊誌「NEWSがわかる」を北九州市内と遠賀・中間地区にある児童養護施設を対象に無料で届けたい」と費用を含む寄付があった。当事業団が、各施設の意向を確認したところ、9施設が「希望する」と回答。合計で「毎日小学生新聞」22部▽「NEWSがわかる」20冊を届けた。
67万3200円

児童福祉施設への新入学・卒業記念祝い品プレゼント 恒例の本団主催事業。歳末助け合い募金「愛の義援金」を財源に、児童養護施設や障害児、肢体不自由児、盲ろう児などの児童福祉施設の小学校入学と中・高校卒業予定者に、お祝いの記念品を贈っている。今年度も福岡・山口両県内の施設児童ら計66施設を対象に該当者の有無を調査。62施設に対象者394人がおり、新1年生にはランド

セルかリュックサック、手提げセット、雨具セット、図書カード(4千円分)のいずれか
▽中・高校卒業予定者には目覚まし時計か図書カード(5千円分)を選んでもらい、
祝い品としてプレゼントした。 287万1773円

【障害者福祉事業】

86万0009円 (9.8%)

助成・援助の事業件数としては最も多く、今期は新規1件、継続事業12件で計13件。うち名義後援は3件だった。

気軽にサポートプロジェクト 障害福祉の啓発事業に取り組む「一般社団法人 生き方のデザイン研究所」が、交通バリアフリー研究・活動の「気軽にサポートプロジェクト」として視覚障害者編(2018年度)▽聴覚障害者編(2020年度)に続く第3弾の知的障害や発達障害者編を企画。印刷製本や通信運搬費など経費の一部を助成した。 10万円

「声の点字毎日」発行 週刊「点字毎日」を録音テープに吹き込み、ハンセン病で視覚も皮膚感覚も失った人たちへ寄贈する事業で、月に2回発行する。東京、大阪との3事業団共同事業。2007年8月の配布分からデイジー版CD「点字毎日 音声版」に切り替えた。西部管内では菊池恵楓園(熊本)、星塚敬愛園、奄美和光園(ともに鹿児島県)の3カ所の国立ハンセン病療養所に贈った。 5万円

第90回全国盲学校弁論大会 全国盲学校長会と毎日新聞社会事業団、点字毎日が主催して10月7日、岡山市の岡山県立岡山盲学校で開催。出場者が会場に集まって開催するのは3年ぶりで、全国7地区予選で選ばれた9人が出場。「母が教えてくれたこと」と題して発表した神戸市立盲学校高等部普通科3年、浅井花音(はなね)さん(18)が優勝した。 10万円

第6回盲学校フロアバレー大会 山口市の維新大晁アリーナで8月24～26日に開催。平成28年度までは野球大会だったが、29年度からフロアバレー大会に衣替え。全国8地区代表校と主管校の10チームが参加した。山口開催のため後援、助成した。 10万円

第47回「わたぼうし音楽祭」 「奈良たんぽぽの会」などが主催する障害のある人たちの「心を歌う音楽祭」で、毎日新聞社や同社会事業団などが後援。8月に奈良県文化会館(奈良市)で開かれる予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け断念、オンラインで12月11日開催した。最高賞の「わたぼうし大賞」に、福井県鯖江市の小玉聖紀さん(58)作詩、茨城県牛久市の利根川朗さん(38)作曲の「プリズムのように」が輝いた。文部科学大臣賞は、奈良県桜井市の奥谷奈穂子さん(41)作詩、静岡県の長澤ちりんさん作曲の「いま」が選ばれた。全国から作詩の部に340作品、作詩・作曲の部に328作品の応募があった。 5万円

日本ふうせんバレーボール協会運営費助成 「障害者の完全参加と平等」

を掲げ、北九州発祥の風船バレーボールの普及・振興を図る同協会の年間運営費を助成している。2012年度までは全国大会への助成という名目で助成金を支出してきたが、13年度から同協会から「年間運営費に変更してほしい」との要請があり、変更して支出。競技普及のためルール解説のDVDが完成、英語版も計画しており、22年度も同様に助成した。 10万円

九州地区ろう学校体育・文化連盟大会 九州地区ろう学校の体育・文化の祭典で、3年ぶりに9月29～30日、沖縄県総合体育館、沖縄市陸上競技場で開催。九州各県のろう学校の小学生～高校生が参加した。当事業団は、各競技の入賞者へのメダル(132個)や賞状(141枚)、レプリカ(3個)を贈った。 13万9009円

第33回北九州市障害者水泳大会 市障害者スポーツ協会が市内の10歳以上の身体障害児者を対象に11月20日、小倉北区三郎丸の市障害者スポーツセンター「アレアス」屋内温水プールで開催した。市内各区から約50人の障害者が出席、日ごろの練習の成果を発揮した。 5万円

第41回北九州市障害者ボウリング大会 市障害者スポーツ協会が障害者スポーツ振興のため12月18日、八幡東区の北九州桃園シティボウルで開催。各地から13歳以上の選手39人、ボランティア18人が参加。障害区分に分かれて1人2ゲームずつプレーし順位を競った。 5万円

第42回「出発を励ます集い」 ^{たびだち} 北九州市と市手をつなぐ育成会が市内の知的障害児者の中で、入学や卒業、成人、還暦など人生の節目を迎えた人たちを励ます催し。今期は、3年ぶりに対象者のみ会場に集い、写真やコメントを載せたリーフレットを作った。当事業団は後援するとともに対象者50人に記念品の置時計を贈って励ました。 12万1000円

◇名義後援事業◇

第59回点字毎日文化賞 盲人文化の向上と福祉増進に先駆的業績をあげた個人、団体を表彰することで社会の理解を深めるのが目的。22年度は、視覚障害者向けパソコン用ソフトウェアの開発・販売を行う「高知システム開発」(高知市)が選ばれた。

第41回肢体不自由児・者の美術展 全国規模の美術展で、23年2月20日～26日、福岡市役所1階市民ロビーとアクロス福岡メッセージホワイエで開催。全国から応募のあった絵画、書、タイプアート、デジタル写真の中から、入賞作品を展示了。

第33回全国ふうせんバレーボール大会 2020年度から新型コロナ禍で中止となっていたが、募集チーム数、選手、スタッフの人数を絞り、開催時間も短縮して3年ぶりに3月19日、北九州市立総合体育館で開催した。

【医療福祉事業】 130万円(14.8%)

医療ボランティア「福岡ファミリー・ハウス」へ助成 同グループは福岡市内に3施設・4部屋を確保、九大病院や九州がんセンターなどに入院する患児や家族に1家族1泊1000円という安価で宿舎を提供し、喜ばれている。当年度も募金額に左右されない医療福祉事業として社会福祉寄金から支出した。 30万円

コロナの医療従事者に支援金 新型コロナウイルスの全国的な感染拡大で、医療崩壊を防ぐため前々期から募金を始め、当期も継続。当事業団は、感染者が多く病床使用率が高い地域の看護協会へ合計100万円を配分、残金は次年度に持ち越した。

福岡県看護協会へ	40万円
熊本県看護協会へ	30万円
鹿児島県看護協会へ	30万円

【高齢者福祉事業】 40万円(4.5%)

「80歳からの合唱団北九州」運営費助成 「80歳からの合唱団北九州」は、①歌うことで健康寿命を延ばす②歌うことで生きがいができる③歌うことで仲間をつくる④歌うことで社会に貢献する（地域のイベントに参加、福祉施設や病院等を慰問する）⑤合唱仲間で生きる楽しみをつくる——が目的。現在は120人が参加、月1回の練習には100人ほどの団員が参加している。年1回「ウェルとばた」でのコンサートを開き（新型コロナのため20～21年は中止）、各区でのクリスマスの催しにも出演して元気な歌声を響かせている。費用は団員の会費でまかなっているが、活動を充実させるため、遺贈寄付（高齢者福祉での利用を希望）から運営費を助成した。 20万円

高齢者支援「ホームヘルプ」「子育て支援」など 「高齢社会をよくする北九州女性の会」は、1985年6月に発足。高齢社会の諸問題を調査・研究するとともに、情報の提供や実践活動を通して望ましい高齢社会を目指している。

発足から1年後には主に働く女性支援のために老親の話し相手や軽度のケア、簡単な家事などをサポートする「ホームヘルプ活動」を開始、1994年からは「遠くの親戚より近くのグランマ」を合言葉に、子育てに何らかの困難を覚える人たちのために「子育て支援活動」を行っている。

さらに、少子・高齢社会の市民講座を開催。シンポジウムや講演会などを通して「ケアしあう地域社会の構築」を目指している。活動を継続、充実させるため、遺贈寄付から助成した。 20万円

【福祉団体助成事業】 130万7880円(14.8%)

今期は、前年度と同じ12団体に助成金を贈った。いずれも継続事業で、前年度並みの助成をした。

あしなが育英会へ助成 07年度から社会事業団で受け付けを始めた「母の日・父の日募金」を原資に同育英会の運営資金として助成した。この募金は、母の日、父の日にちなみ「プレゼントをしたい親がもういない」「プレゼントをしたつもりで、そのお金を遺児たちへ」との趣旨で、05年から毎日新聞の紙面キャンペーンとしてスタート。当初はあしなが育英会を募金のあて先にしていたが、親がいても恵まれない子どもたちが急増している現状から「遺児に限らず、恵まれない全ての子どもたちに対象を広げよう」と、07年度から毎日新聞社会事業団が窓口となった。今期も5~7月の3カ月間で募集、西部への募金は19件24万7350円あった。前期からの持ち越し分と合わせ、17万円を児童福祉事業の「かんらん舎」に助成、残りを「あしなが育英会」に助成した。

10万7880円

福岡、北九州、佐賀、大分の「いのちの電話」へ助成金 自殺者の総数は12年度から3万人を下回るようになったが、自殺予防のための電話相談「いのちの電話」は、依然として重要な存在だ。しかし、どの団体も維持運営費は寄付金が頼りで、電話相談を受ける相談員は主婦を中心としたボランティアが24時間体制で当たっている。22年度も4団体に助成し、うち佐賀、大分両団体は通年事業で、福岡、北九州両団体は歳末募金「愛の義援金」を財源に助成した。

40万円

「福岡盲ろう者友の会」活動費助成 福岡県内の視覚、聴覚とも不自由な人たちの福祉向上と社会参加の促進のため03年4月に発足。盲ろう者は外出するにもボランティアの手助けが欠かせないが、会員の会費やカンパが頼りの運営で、当事業団は発足当初から継続して助成している。

15万円

ホームレス支援のNPO法人抱樸に助成金 長年、ホームレスの支援、自立活動に取り組んでいる抱樸では①ひとりの路上死も出さない②ひとりでも多くの人を路上から脱出させる③ホームレスを生まない社会を創造する——を掲げて活動している。特に②の活動では生活支援、住宅支援、各種保健プログラムなどを展開しながら、自立に向けた取り組みをしている。助成金は、炊き出し現場で配布する医薬品購入に充てている。

10万円

山口県共同募金会 歳末募金「愛の義援金」を財源に、同県共同募金会を通じ、障害のある子どもたちのために活用した。共同募金会は肢体不自由児協会に助成金全額を寄託し、肢体不自由児のための研修費用に充てた。

10万円

福岡県交通遺児を支える会 交通安全運動に積極的に参加するなど事故防止運動を展開する一方、交通事故遺族の実態調査や遺家族への盆・正月の見舞金や入学・卒業祝い金の贈呈、各種の生活相談を受けるなど、交通遺児の支援事業をしている。

15万円

九州盲導犬協会 九州及び沖縄・山口両県をエリアに視覚障害者の自立支援のため、多数の盲導犬を育成し、無償貸与している。現在48頭が実働しているが、なお28人の方が待機中で、絶対数が不足しているという。更なる訓練士の養成や繁殖犬の増加などが求められている。 10万円

北九州あゆみの会 北九州市内の障害者の自立支援のために、本人や家族の各種相談を受けている。会では3人の相談員を配置、状況や生活環境に合わせた福祉サービスなどへの橋渡しをしており、助成は車両維持管理費や人件費に充てられた。 10万円

北九州市障害福祉ボランティア協会 障害者福祉を中心としたボランティア推進組織で、ボランティアをする正会員と支援する企業・団体などの賛助会員で構成。会報の発行や啓発パンフの作成、講演会や研修会、出前講座、養成講座を開催するなどしてボランティア養成に努めている。 10万円

【毎日社会福祉顕彰】 109万5678円(12.4%)

毎日新聞社会事業団の創立60周年を記念して昭和46(1971)年に創設した東京、大阪、西部3事業団の共催事業。社会福祉の向上に貢献した個人や団体を顕彰するもので、今期の第52回毎日社会福祉顕彰には19件の推薦応募があった。

審査の結果、障害者によるカウンセリングを障害者主体の組織で展開し、当事者が支援の担い手として社会を動かすモデルをけん引してきた特定非営利活動法人ヒューマンケア協会代表の中西正司さん(東京都八王子市)▽東南アジアやアフリカで地雷撤去活動の支援を続け、子ども兵士や女性への職業訓練による社会復帰と自立も支援している特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス(小川真吾理事長=京都市)▽1909年設立、国の障害者施策が整う前から先駆的な事業を開してきた社会福祉法人福岡ろうあ福祉会(山田裕嗣理事長=福岡市)——の2団体1個人に決まった。受賞者・団体には賞牌と賞金(各100万円)が贈られた。

109万5678円

【歳末事業】

歳末助け合い募金「愛の義援金」 12月1~28日を受付期間として募集。毎日新聞紙上で募金受付開始の社告を掲載したほか、過去の寄付者らに協力依頼状を送付するなどして募金を呼び掛けた。その結果総件数は774件、募金総額は953万954円で、前年度に比べ件数は64件減▽金額は、約48万円減少した。種類別では、海外救援金と小児がん征圧募金のみ増加した。

＜歳末募金＞

社会福祉基金	460件	539万0909円
海外救援金	87件	77万8560円
小児がん征圧募金	91件	88万9460円
	小計	638件 705万8929円
東日本大震災救援金	1件	20万0000円
毎日希望奨学金	131件	215万0025円
コロナ対策医療支援金	4件	12万2000円
	総計	774件 953万0954円

＜募金経費＞

給与・福利厚生費	19万0680円
通信費	35万6664円
印刷・製本費	9万1762円
事務用消耗品費	880円
雑費	7万4460円
	合計 71万4446円

社会福祉基金から経費を引いた差額(539万0909 - 71万4446)
467万6463円は一般福祉事業費に充てた。

歳末チャリティー「全国寄贈書画・陶工芸品即売展」 全国の著名な画家や陶芸家などから寄贈された作品を一堂に集めて開く、師走恒例のチャリティー行事として多くの美術愛好家に喜ばれている。新型コロナ対策をして12月第1～第3週の土・日曜日、山口、北九州(小倉)、福岡の順で開催した。

今期は洋画、日本画、陶芸、工芸、書家、高僧・宗教家、文化・芸能人などの約530人の方々から、約960点の寄贈を受けた。寄贈された作品に前年から引き継いだ作品も加えて3会場に配分。それぞれ1500～1600点の大規模な作品展になり、九州・山口はもとより中国、関西方面からも愛好家らが訪れた。また、23年3月11日には、年度末展を小倉で開催。歳末展で残った作品を、さらに求めやすい価格で即売した。

益金は、恵まれない子どもたちや障害者などを支援する福祉団体への運営助成金や障害児・者研修など各種福祉事業の助成金、ホームレス自立支援などに取り組む団体への助成金として活用したほか、23年度事業にも役立てる。

会場別売上高と経費は以下の通り。

＜会場別売上高＞

期間外(21年4～11月)	24万6850円
山口展(山口井筒屋)	367万8410円
北九州展(小倉井筒屋)	607万3491円
福岡展(アクロス福岡)	182万5200円
年度末展(毎日西部会館)	302万3950円
	1484万7901円

＜即売展経費＞

書画材・額縁等	250万8470円
作品寄贈者謝礼等	17万3674円
会 場 費	279万0496円
労 務 費	293万3135円
通 信 ・ 運 搬 費	156万0357円
印 刷 ・ 製 本 費	16万4615円
旅 費 ・ 交 通 費	26万8167円
事 務 費	4万5438円
雜 費	26万7054円
	1071万1412円

※差額(1484万7901円-1071万1412円)の413万6489円は、社会福祉基金として一般福祉事業費に充てた。

収益事業（保険に関する事務の受託事業）

当事業団唯一の収益事業として位置付けている保険事務受託事業は、毎日新聞西部本社とその関連会社の九州センター社員を対象に、生命保険の事務作業を受託。令和4年度の収入は前年より約1割少ない72万3115円だった。